

昨年度の「比較文化論」の授業では、関西外大

講師の小林純子先生を招いた講演会が実施された。この日の講演のテーマは「異文化探求」。小林先生の講演が一通り終わり質疑応答に入ると、質問を求める生徒たちの手が、次々と挙がり始めた。

「先生が著書で書かれている内容の中で、私は疑問を感じている点があります」

「先生はアメリカ人と日本人の違いについて、次のような点ではどう考えていらっしゃるのでしょうか」

1人の生徒が質問の口火を切ると、それに触発されてほかの生徒も活発に質問を繰り出していく。生徒自身も友達が出す質問や意見の多さに驚いた様子だったという。

「私自身もびっくりしました。生徒たちが、臆することなく講師の先生にスバズバと質問する様子にとっても感心しました」と、昨年度「比較文化論」を担当していた加藤治之先生は振り返る。

「比較文化論」は、嵯峨野高校京都コースの2年生の選択科目である。この授業では1、2学期の間、講演会の講師に招いた小林純子先生の著書『Coping with Culture Shock』(成美堂)をテキストとして用いていた。同書は英語で書かれた本で、著者がアメリカに留学したときに体験した、

比 比較文化論の授業はALTと英語教師のチームティーチングで行われ、日本語と英語を交えたディスカッションも取り入れられている。



京都府立 嵯峨野高校

自分の視座を確立させ 異文化を理解する



京都府立嵯峨野高校
山本茂彦 Yamano Shigetaka
昭和35年大阪府生まれ。
英語担当、八幡高校を経て、
平成7年度から同校勤務。
10年度より、
専門学科教育推進部長に就く。

周囲と自分との間に起こるさまざまなコミュニケーションギャップを描いたものである。各章ごとに著者のコメント、アドバイ스가書かれており、また「アメリカでは……、日本では……」「アメリカ人は……、日本人は……」という表現が多く含まれているため日本とアメリカの文化比較がしやすく、テキストとして使いやすいのが特徴だ。

授業は週1回2時間連続、イギリスやアメリカ出身のALT(外国語指導助手)と英語教師のチームティーチングで行われた。2時間のうち、最初の1時間はテキストの読解にあて、次の1時間は日本語と英語を交えたディスカッション形式で進められた。

「テキストを読みながら、『アメリカ人はこんなときにはこう思います。でも日本人はこうです』という単なる講読に終わってしまったりつまらない。そこで、生徒たちに自分の意見を発表させるようにしました。しかも感想レベルにとどまらずに、テキストで書かれているようなコミュニケーションギャップに自分自身が直面したときに、『私ならどうするか』と考えさせるような機会を持ちたいと思いました(加藤先生)。

テキストを読み進めると、著者のコメントに強く共感できる部分がある反面、当然意見が違ふ部分も出てくる。それは生徒だけでなく日本人にとつての「異文化」で育ったALTも同様である。ときにはALTの方から異論が発表られることもあり、それに対して生徒も敏感



京都府立嵯峨野高校
加藤治之 Kato Haruyuki
昭和30年京都府生まれ。
英語担当、前任校は西乙訓高校。
同校には平成7年度から勤務。
京都コース科開設準備部を経て、
10年度より国際文化システム主任。

に反応して意見交換をする。テキストを媒介として、授業は生徒の意見形成をする場として効果的に機能していった。

テキストに『Coping with Culture Shock』を選んだのは

ある理由があった。国際科や英語科には、たいいてい比較文化に関する科目がある。だが加藤先生は、従来の比較文化の授業に、なにかもの足りなさを感じていた。

「文化には、文字や芸術、歴史や政治などの目に見えるものと、思考様式や価値観などの目に見えないものがあります。コミュニケーション上の食い違いは、主として目に見えない文化の違いから生まれてきます。価値観の違いが、両者を決定的に分かつことがあるのです。そこに焦点をあて、異文化の人間とのコミュニケーションを成立させるにはどうすればいいかを模索する授業が必要だと、私たちは思っていたんです」。

『Coping with Culture Shock』は、外国に暮らす日本人の日常的な行き違い、齟齬、失敗を描いた本である。加藤先生の思考と、ぴったり一致する著書だったというわけだ。

だが学習のテーマとして、思考様式や価値観などの文化を扱うことは、はっきりと目に見えないものだけに、かなり難しいことでもある。テキストでは意識的に「アメリカ人はこう、日本人はこう」というように、ステレオタイプの両者を類型化しているのだが、日本人にもいるんな人がいるわけで、本来なら一概には論じ

られない。極端ないい方をすれば人間は1人ひとりで立つものだし、逆に考えれば、人間なんてみんな同じ生き物であるともいえる。

「しかしそれでは科目として『比較文化論』は成立しません。かといって生徒たちに、ステレオタイプのな発想をしてほしくもないわけで、その辺りのさじ加減は難しいですね。ともあれ、コミュニケーションを成立させるためには、異文化について考えることが不可欠です。そして異文化を考えると、自分たちの文化や自分自身について考える目を養つことでもあります。」(加藤先生)

異文化理解の作業

を通過して、同時に自分たちの文化や自分自身に対する考えも深めていく。これは「比較文化論」だけでなく、国際文化系統の授業や行事全般に渡って、行われていることでもある。嵯峨野高校に人文芸術、自然科学、そして国際文化の三つの系統からなる京都こすもす科が設置されたのは平成8年度のことである。専門学科教育推進部部長の山笠彦先生は、国際文化系統の教育目標を次のように説明する。

「国際文化系統では、当然英語力の養成を重文化や宗教、習慣についても勉強しておくのだといえます。相手が控えめな表現を多く用いる国なら、通訳者もそれに見合った訳語を考えなくてははいけませんからね。そんなふう国際舞台の第一線で活躍している方から直接話を聞くことで、生徒たちもなぜ異文化理解が重要なのか、すんなり納得することができたようです。」(山笠先生)



チームで

「LL演習」で
行われる「LL演習」の
目的は、言語の背後にある
歴史、慣習にまで目を向ける。

比較文化論の授業では、生徒たちがグループに分かれて興味を持った国について調べ、ボードにまとめて英語で発表した。

視しています。生徒も、中学校時代から英語が好きで、将来は国際的な分野で仕事をしたいという生徒も集まってきましたからね。しかし生徒を、単なる英語屋さんにはしたくない。他者とコミュニケーションをとるためには、まず自身自身のアイデンティティをしっかりと確立すること。同時に相手の文化を理解する能力が必要です。英語力と異文化理解能力養成が、国際文化系統の2本柱です。」

現在、国際文化系統で取り組んでいる活動としては、「ディベート入門」などの課外講座、青年海外協力隊の方の話を聞いたり、ユニセフなどを訪問する研修旅行、オーストラリアへの海外研修ツアー、インターネットによる海外の高校との文化交流や、社会人講師を招いた講演会などがある。

講演会は「比較文化論」以外でも、「総合英語」「英語表現」「英語理解」などの授業で随時実施されている。平成9年度には、同志社大のクラウス・シユベネマン教授による「国際化への条件」、会議通訳者の佐々木悦子さん「通訳者に学ぶ視点と技術」ともに1年生・総合英語(神戸市外大・中野道雄教授「言葉の意味、行動の意味」)2年生・英語表現」といった講演があった。

また異文化理解への試みは、「比較文化論」や「外国事情」などの選択科目ばかりでなく、「総合英語」「英語理解」などの必修科目の中でも取り組まれている。

「必修科目では、テキストは検定教科書を使っています。しかし、ただ生徒に英語力を身につけさせることだけを目標にした授業をするのではなく、同時に教科書の内容を肉づけし、異文化についても理解していけるように工夫をしています。例えば、教科書で『風と共に去りぬ』が出てきたら、アメリカ出身のALTに、アメリカ人は南北戦争をどのような視点でとらえているかを話してもらったりしています。一つの授業の中で、英語力を高め、異文化理解を深められる授業をすることが理想です。」(山笠先生)

授業では、生徒の好奇心を引き出すような形で、変形文法や語用論などの大学レベルで学ぶ内容についても触れることがあるという。質問としての語学、生徒たちが興味を持つきっかけになれば……と嵯峨野高校の教師たちは期待している。

「英語をさらに深く学んでほしいというこちら側の思いを、伝えていきたいと考えています。授業の内容が教科書レベルから離れたところまで進んだときに、身を乗り出すようにして話を聞く生徒もおり、こうした態度を大切にしていきたいと思います。」(加藤先生)

京都こすもす科

では、この3月に1期生が卒業



った。

「講演会の中でも特に印象的だったのが、佐々木悦子さんのお話ですね。通訳者は日常的にどのような訓練をしているのかを語ってもらったのですが、講師が強調されていたのは、とにかく勉強が大事ということ。それも語学の勉強だけではなく、とつてい足りないというんです。例えば石油関係の国際会議があったとします。そのすると石油に関する専門用語はもちろん、相手国の

する。これまでの3年間は、英語力と異文化を理解する能力の養成という明確な目標に沿って、さまざまな取り組みが実践されてきた。そして山笠先生は、国際文化系統における今後の課題は、「生徒の自発性をいかに育てるか」にあるという。

「これは本校に限ったことではないと思いますが、学校側が準備したものを、生徒たちが受け身的にこなしていくという傾向が強くなりがちです。でも、いくら学校が海外研修や交流会を用意しても、生徒たちが受け身のままでは、異文化や自らの生き方について考えるきっかけは生まれません。私たちは基本的には現在の取り組みを継続させようと思っていますが、できる限り生徒自身を前面に立たせ、教師はサポート役に回るような形を作っていきたいですね。」

例えば、海外の学校などとの交流会、代表スピーチや司会進行役を経験した生徒は、以前とは見違えるように成長する。それを一部の生徒だけでなく、場面ごとにいるみんな生徒に成長のチャンスを与えられればと、山笠先生は考えている。

英語力と異文化を理解する力、そして自発性これらの力を身につけた生徒たちが、今後日本の社会や国際社会の中でどんなふう生きていくか。山笠先生、加藤先生をはじめとする京都こすもす科国際文化系統を担当する教師たちは、生徒たちの5年後、10年後の姿を楽しみにしている。

「L」演習

の授業が行われている語学演習室からは、生徒たちの明るく活発な声が聞こえてくる。

週1回、武生東高校では、2年生を対象に、「L」演習」といつても同校の場合は、「L」教室で行われる授業のことではない。教師と生徒、あるいは生徒同士が対話を重ねるディスカッション形式の授業のことを指している。授業中に使用する言語は英語のみで、日本語は原則禁止となっている。「L」演習」に使われている語学演習室はほかの教室から離れているため、生徒たちが大きな声で発表してもそれほど周囲に迷惑がからない。

「L」演習」は、武生東高校国際科の目玉として位置づけられている授業である。同校国際科主任の金牧廣先生は「L」演習」の目的について、「L」説明する。

「国際科で学ぶ生徒の多くは、将来海外で生活したり、国際的な舞台で働きたいと考えています。そのためには語学力だけでなく、自分の考えをきちんと相手に伝え、相手の考えも受け入れることができる能力が必要です。その能力を生徒に身につけさせるための授業が『L」演習」

持つ価値観は、相手を説得するためには自分の意見をはっきりと主張しなければいけない、というものです。本校の生徒たちは将来国際社会で生きていくことを望んでいるわけですから、我々教師は今のうちからそういうことに少しでも慣れさせておきたいという気持ちで授業をしています。

武生東高校では「L」演習」以外にも、生徒が意見発表する機会を

生徒がみんなの前で自分の意見を発表する。自分の意見を持ち、相手の意見を受け入れる能力を養うため、「L」演習」ではディスカッションを重視している。



武生東高校

自らの意見を持ち、国際社会に生きる力を養う



福井県立武生東高校国際科主任
金牧 廣 Kanemaki Hiroshi
昭和24年福井県生まれ。英語担当
開校4年目の平成2年度より
武生東高校に勤務。
平成8年度より国際科主任を務める。

習。だからディスカッションを重視しているんです。

金牧先生の言葉を受け、国際科の英語の授業を担当している水嶋俊光先生も、次のように話



福井県立武生東高校教諭
水嶋俊光 Mizushima Toshimitsu
昭和37年福井県生まれ。
担当教科は英語。
前任校は丸岡高校。
平成5年度より武生東高校勤務。



福井県立武生東高校
槇谷裕子 Makitani Yunko
昭和47年福井県生まれ。英語担当。
新卒で平成8年度より同校に勤務する。
国際科2年担任。インターアクトクラブ
(ボランティア)顧問。

す。

「日本社会ではこれまで、自分の意見を明確に口にしないのが、美徳とされるような風潮がありました。しかし、日本以外の多くの国々が

きる限り持っている。特に重視しているのが、海外の人たちとの交流だ。毎年多くの外国人が同校を訪れて授業を見学し、ときにはいっしょに授業を体験する。姉妹校提携をしているニュージーランドのリッカートン高校とアメリカのラムジー高校からは、隔年でそれぞれ十数名の生徒たちが訪問している。もちろんこのような受け入れだけでなく、武生東高校からも姉妹校を訪問したり、海外へ長期留学をしたりと積極的に国際交流を進めている。

「生徒にはいろんな文化や考え方に触れる中で、自分の意見を形成してほしいと思っています。本校の英語教育のモットーは、習う、使う、広げる、ですが、『L」演習」や国際交流はそれぞれ、使う、広げる、取り組みにあたります。」(金牧先生)

11月20日金曜日

の7時間目、語学演習室で

は、2年6組(国際科)の生徒を対象とした「L」演習」の授業が行われていた。この日のテーマは「Aging population」。高齢者の問題について話し合おうというものだ。

「L」演習」では、生徒がテーマに関心を持ち、また積極的に発言できる雰囲気を作るために、いろいろな工夫をしている。2年生向けのテキストとして用いられているのは「LET US TALK ABOUT THE WORLD」。武生東高校創設期の教師による自作教材である。環境問題や教育問題など、世界を取り巻くさまざまな課題を取り上げた内容となっている。このテキスト

は、同校が開校した昭和62年以來ずっと使われ続けており、毎年若干の改訂は行うとはいうものの、「完成度としては極めて高いレベル」(水嶋先生)にあるという。

この日のテーマの「Aging population」も、テキストのLessonに収められているものである。ただし授業は、必ずしもテキストだけを頼りに行われているわけではない。「L」演習」の授業を担当している槇谷裕子先生はこんなふうに語る。

「テーマは、生徒が関心を持ちやすいように、その都度タイムリーなものを取り上げるようにしています。例えば、ダイアナ妃が事故死したときにはパパラッチの是非について議論しましたし、沖縄への修学旅行前には沖縄の米軍基地問題をテーマにしたこともあります。今日の授業が高齢者問題だったのは、『英語一般』の授業の中で、『晩秋』という老人問題を扱った映画を生徒に見せたばかりだったから。生徒の記憶が鮮明なうちに、問題意識を深めさせたいと思っています。」

授業は、日本人教師2人、ALT2人のティームティーチングで行われる。一口にディスカッション形式の授業といっても、2人1組のペアトークや、数班に分かれてのグループディスカッションなど、さまざまな形態を取り入れているのが特徴だ。

普段、授業はイントロダクションとして4人の教師による世間話からスタートする。「最近なにか変わったことはありませんか?」「そ

「いえ、こんなことを経験しましたよ」。そんな
なげない会話が進むうちに、今回のテーマで
ある高齢者問題を話題として上手に織り込んで
いく。

教師側の話題提供を受けてから、今度は生徒
たちが隣の席の生徒と顔を合わせて、ペアト
ークを始める。この日の論題は、「Do you want to
live long? (あなたは長生きしたいですか?)」と
いつもの。

「いきなりクラス全体のディスカッションに
持ち込まないのは、そうすると発言する生徒の
数が限られるからです。でもペアトークは1対
1の会話だから、自分も必ずなにか話さなくて
はいけなくなります。また内気な生徒でも、比
較的気軽にしゃべることができるといふメリッ
トもありますね」(横谷先生)

それからテキストを読み、そのあとは一つの
命題について、ペアディベートを行う。今回の
命題は、「Old people in Japan are happy.」(日本
の老人は幸せだ)である。ペアトークで口が滑
らかなった生徒たちは、自分の立場に立つて
賛成・反対意見を述べていく。そして、クラス
全体のオープンディベートに移り、「日本の老人
は幸せである」という同じ命題に対して、クラ

じっくり考えることって、そんなにはないです
よね。でも授業を通して、ほかの人の意見を聞
けるのは楽しいですね。特に、A.L.T.の先生の
意見は『へえ、そういう考え方もあ
るんだ』って参考になります」(磯村
さん)

神谷さんは1年間のアメリカ留学
を経験しているが、「LL演習」の授
業が留学中に役立ったという。

海 外の姉妹校の生徒たちが
武生東高校を訪れ、いつ
しょに授業を受ける。異なる
考え、文化にじかに触れる機
会である。



ス全体で賛成派と反対派に分かれてディベート
が行われる。

最後に行われるグループディスカッションは、
この日の授業の総まとめとして位置づけられる。
数班に分かれて、高齢者問題はどつすれば解決
するかを話し合った。司会係や記録係を設定し、
みんなで議論しながら話をまとめていく。そし
て各班の代表者が、クラスメート全員の前で議
論の内容を発表して、1時間の授業が締めくく
られる。

最近の生徒は

他者に自分の意見を
述べることをあつく
うに感じる……。

そんな声を耳にすることがよ
くある。だが「LL演習」に出席している生徒
たちは、驚くほど伸び伸びと、そして積極的に
発言をする。「もともと話したがり屋の生徒が集
まっているんですよ」と水嶋先生は語るが、生
徒が臆せず話せるように教師が工夫している
のも事実だ。

『LL演習』の目標は、あくまでも生徒が自
分の意見を述べ、互いに考えを深め合っていく
こと。だから自分の意見を持つことと、文法的
な間違いを気にせずに、伝えたいことを皆に伝
えられるように話すことを大切にしています」

「留学中、アメリカ人の友達のお父さんから
『日本人はアメリカ人が嫌いなんじゃないか?』
って問いかけられたことがあるんです。私はそ
うじゃないんだってことを、持つてる知識のす
べてを使って話したんですが、そんなことがで
きたのは授業で訓練していたおかげだと思いま
す」

早川さんは、福井県の「高校生英語弁論大会」
(平成10年度)の優勝者だ。

「私もきれいな発音で話す人はたくさん
いました。それでも私が優勝できたのは『この
人はなにか自分の意見を持っているな』という
ことを、皆さんに感じてもらえたからだと思い
ます。普段の授業で、自分の意見を発表する機
会を数多く持てたのがよかったのかもしれない
と思いますね」

また、1年生の2人は高校に入学してから、
自分の英語力がどんどん伸びていくのが楽しい
と語る。

「しゃべることに対する抵抗感がずいぶんな
くなりました」

国際社会で

生徒たちが生きていくと
きの土台になるような教
育をしたい……。

武生東高校の教師の思いは、
その点で一致している。だが大学入試のことを
考えたときに、シレンマに陥ることもあるとい
う。

「現在の大学入試を見ると、本校で行って
いる授業と完全に対応していない部分もあります。
もちろん、本校の生徒は受験で必要とされる英

アトークのメリットは、
1対1の会話のため、
必ずしゃべることになる点。
内気な生徒でも比較的しゃべ
りやすい形態である。



(横谷先生)

放課後、国際科の生徒たちに授業についての
話を聞く。2年生の磯村さん、神谷さん、早川
さん、1年生の植田君と坪川君の5人である。
5人とも「LL演習」は、お気に入りの授業の
一つだという。

「ジェンダーや外国人労働者問題について議
論したことがあるんですが、普段はそんなこと

語力は十分あり、大学入試においてもとてもよ
い成果を上げています。しかし、本校の生徒が
特に抜き出しているのは話す力や聞く力ですか
らね。もしも、受験英語指導にシフトすれば、
いっそう進学実績は伸びるかもしれない。だけ
ど、本校国際科の目標はそれだけではありませ
ん。むしろ、大学入試の方が『話す・聞く』力
を見るような問題に変わることが期待しながら、
これまでの取り組みを継続していきたいと思っ
ます」(金牧先生)

自分の考えを述べる力を身につける英語教育
では、国際科の取り組みを、普通科の授業にも
生かすことはできないのだろうか。
「国際科で行っているような授業スタイルを、
普通科でもオラル・コミュニケーションの中
で取り入れています。同じテキストを使い、ペ
アトークなどをさせながら、それなりの成果を
上げています。国際科と同じレベルにまで達し
てはいませんが、教師の取り組み次第で生徒
はこたえてくれるものです」(水嶋先生)

国際科に限らず普通科の生徒の中にも、将来
国境を越え幅広く活躍するような者は必ずいる
はずだ。また、将来の活躍の場を海外などに求
めず、日本の中で生きていくにしても、「自分の
意見を述べ、相手の意見を聞く力」は、これか
らの時代を生き抜くうえでより不可欠なもの
となる。

武生東高校の教師たちは、国際科という枠組
みを越えて、高校における新しい観点での英語
教育を志向しているのだ。